



# 泉 幸甫 | 而邸 | じてい [2008年]

Kosuke Izumi

中村好文—イラストも

Yoshifumi Nakamura



革のソファをL型に造り付けたアルコーブは、読書に良く、お喋りするに楽しく、まどろむに最適で、お酒を呑むにはもってこい

学生時代、私がとりわけ関心を抱いていた日本の建築家は、村野藤吾、吉村順三、白井晟一の3人でした。ですから、この「御三家」の設計した全国に点在する建物を熱心に(大きげに言えばしらみつぶし)に見学して歩きました。

そのころ御三家は3人もまだバリバリの現役で意欲的に活躍していましたから、名作や傑作といわれる作品ばかりでなく、工事中の現場を見学する機会も幾度かありました。

中野区江原町で白井晟一氏が自宅を普請しているという噂を聞きつけて、さっそく駆けつけたのもそのころです。後に「原爆時代のシェルター」と呼ばれることになるこの中庭住宅は、ちょうど屋根工事の最中で銅版を平葺きしていました。その仕事ぶりを私が興味深げに飽かずに眺めていたものですから、働いていた職人が声をかけてくれ、私が建築科の学生で白井晟一の建築を全国各地を回って見学して歩いていると述べて「じゃあ、ちょっとだけ中も見て勉強していったら…」と中に入れてくれたりしました。

「俺たちの世代ってさ、み〜んな白井晟一の影響を受けたんじゃない? この近所にある白井晟一研究所なんか、その当時は一種の“聖地”でさ、弟子入り志願者が朝から晩までドアの前で土下座して入門願いの“行”をしていたらしいぜ」。見学に訪れた「而邸」のソファにおさまり、私がごく軽い話題のつもりで、「泉さんが一番影響を受けた建築家っていったら、やっぱり白井晟一ってことになる?」と質問したら、泉さんからこんな言葉が返ってきました。私は、泉さんの作品を数多く見ているわけではありませんが、実際に見学させてもらった集合住宅や、偶然訪れたフレンチ・レストランや、ときおり建築雑誌で見かける作品の写真などから、なんとなく白井晟一的な「匂い」を嗅ぎつけていたので、この質問を試してみたわけですが、今書いたとおり、泉さんはこの私の「直球の質問」をやんわりとかわしました。

「而邸」を訪れて、真っ先に白井晟一の話を持ち出したのは、つねづね私は、無垢の木材にこだわったり、石材にこだわったり、塗り壁

[建築概要] 名称:而邸 | 所在地:東京都 | 家族構成:夫婦 | 敷地面積:93.31m<sup>2</sup>  
| 建築面積:63.95m<sup>2</sup> | 延床面積:122.99m<sup>2</sup> | 規模:地上3階 | 構造:RC造、木造 | 設計:泉幸甫建築研究所



の素材やテクスチャーにこだわったり、建具のデザインに凝ったりし、それによって醸し出される濃密な空間のムードにこだわったりする、いわゆる「素材派」は、影響を与えたり、影響を受けたりしやすいのではないだろうか、と思っているからです。しかもその影響は「考え方」というのではなく具体的、直接的なモノだけに、作品に顕著に表れやすいと思うのですが、いかがでしょう?

ところで私は、今回「而邸」を見学させてもらうにあたって、心に決めていたことがふたつありました。ひとつは「床・壁・天井の素材や、仕上げの風合いなどをしみじみ眺めたり、撫でさすったりしないよう

にしよう」ということ。もうひとつは、できれば泉さんに「材料や工法に関する質問はしないようにしよう」ということです。雑誌に発表された「而邸」を見ると、そうした「素材派」ならではの、由緒ありげな素材や仕上げが否応なしに眼に飛び込んできて、プランや空間の構成がどうなっているのかとか、日々の暮らしに対する配慮がどのあたりにあるのかとか、私がこの住宅に興味あるところをついつい見失ってしまいそうだったからです。

しかし、案の定といいますか、質問するまでもなくといいますが、私が1階の和室の床の間の造作を眺めていますと、背後から泉さん

が間髪を入れず、「その床板は、天然唐松の無垢の一枚板だよ。丸太で買って、製材所で板に挽いてもらったんだ。いい木目だろう? こんな板は、もう手に入らないぞ。でも、高かったぞう〜」と、ちゃんと説明してくれるのでした。

図面で見ると「而邸」の敷地は細長い五角形です。泉さんはまずこの五角形の敷地をそのままひとまわり小さくしたような五角形を考え、次に庭を確保するために南の角を欠き取った形の建物を作りました。そもそも敷地が変形の五角形なので、その敷地と相似形の



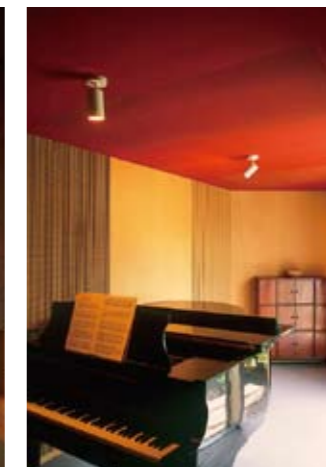
階段を昇り降り、灰色の漆喰壁に突き当たったところを目に入る室内の風景。左側は食堂、右側はアルコーブの空間。障子を透過した光が陰翳礼賛の気分を出している



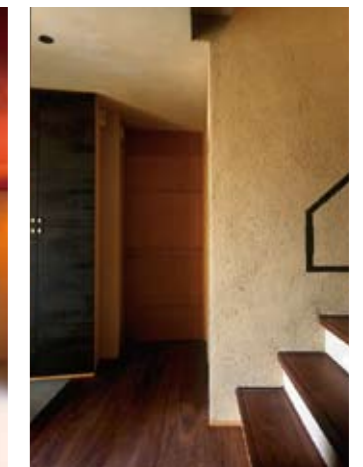
南東の角から見上げた外観。コンクリート打放しの音楽室をガルバリウム鋼板の屋根と壁が覆う。まるでひな鳥をかばう親鳥の翼のよう



泉さんが腕によりをかけたとおぼしき凝った造りの和室。壁は錆土水捏ね仕上げ。床板と吊り押し入れ下の地板は唐松の一枚板で「高かったぞう〜」



1階玄関脇にある泉夫人の音楽室。正面に李朝時代の濱州島で作られた見事な筆筒がある。端正なプロポーションと美しい色彩に、家具好きの私は思わず熱いため息をもらいました



玄関ホール。訪問者はこの階段を昇るところから2階アルコーブへの「道行き」が始まる

建物はどの角も直角ではない変形の建物になりました。建物の1階はRCの壁構造なので問題ありませんが、2階と3階(屋根裏部屋)は木造ですから、見るからに難しそうになっています。五角形のRC造の上に矩形の木造を載せることだってできたはずなのに、木造を熟知しているはずの泉さんが、なぜ、わざわざ仕口もおさまりも悪い、木造に適さない形にしたのか? 私はものごとをできるだけ単純に、平易にしておきたい性分なので、その理由がどう考えてもわかりません。木造を熟知しているから「木造ならどんな形だっておさめてみせる」的な満々の自信とチャレンジ精神のあらわれ?…なのかどうか。想像したとおり木造部分の工事は難航を極め、小屋組は「刻み作業」が終わったところでいったん作業場の床で仮組みして、ちゃんと組み上がるかどうかチェックしたのだそうです。そのことを説明する泉さんの口ぶりには満足感と達成感が感じられましたから、自分自身に難題を課し、それを解決し乗り越えることで自身の木造建築の技量をいっそう高めたかったと見るべきかもしれません。

この住宅は様々な素材や工法が混在しており、それが複雑に絡み合っているように思えますが、実際には全体は非常にわかりやすくできています。基本的には夫婦二人だけの住まいですから複雑になりようがなく、その簡潔さがこの住宅を居心地の良いものになっています。1階に、玄関、音楽室、和室、洗面脱衣と浴室。2階には居間、食堂、台所と寝室。3階(屋根裏部屋)に泉さんの書斎という構成で、入浴をのぞく日常生活のほとんどは2階だけで事足りるようになっています。そして浴室が1階なので、来るべき老後のことを考えてエレベーターが設置されています。そして、私はそのエレベーターが「おお、ここに持ってきたか!」と言いたくなる意外な場所に設置されていることに、虚を衝かれたような気持ちになったり、感心したりしました。私にも経験がありますが、住宅の中にさりげなくエレベーターを設置するのは至難の業なのです。名前は一応ホーム・エレベーターですが、この機械が住宅の内部に持ち込まれると、見えるのは扉だけでも必要以上に目立つだけでなく一種の異物感

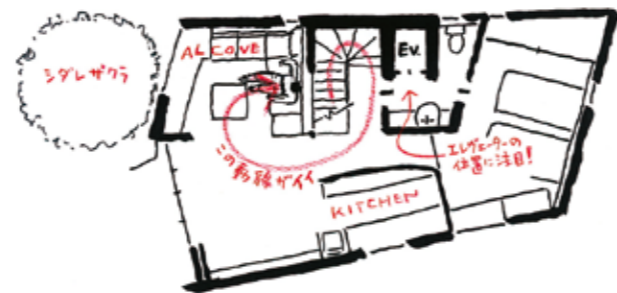
がアット・ホームな雰囲気を損なってしまう傾向があるからです。ですから、できれば可能な限り目立たない場所で、しかもプランの中の重要な位置に設置したいところですが、そんなおあつらえ向きの場所が住宅の内部にはなかなかないものです。泉さんの手柄は、このエレベーターを1階では脱衣所の奥に押し込み、2階では寝室と階段室の間のトイレ・洗面所の一角に入れて(この場所なら心おきなく寝室と脱衣所を裸で行き来できるのです!)この難題を見事に、そして鮮やかに解決したことです。さらに嬉しいことに、そこには「秘密の抜け穴」的な気配も生まれました。

エレベーターの位置もそうですが、この住宅にはもうひとつ私の心をくすぐる場所があります。「場所」と書きましたが、正確には「そこに辿り着くための動線」と一緒に話さなければこの場所の魅力を言い尽くすことはできません。その場所というのは2階居間のソファのあるコーナーで、図面によると泉さんはここを居間と呼ぶずにアルコーブと呼んでいます。たしかに、居間という言葉よりアルコーブという語感の方がピッタリする親密な空間です。このアルコーブのソファに落ち着くために、玄関を入り、目の前にある階段を昇り、昇りきったところでクルリと振り向く感じで体の向きを変え、正面のコテ磨きされた灰色の漆喰壁を目掛けてしずしずと廊下を進み、もう一度ゆっくり振り返って天井の高さを抑えたこのアルコーブに歩み入ります。そして、ひと呼吸置いた後に、ゆったりとした革のソファにおもむろに腰を沈めるのです。こうした一連の動きを平面図の上で再現してみると、それが「の」の字を描くような時計回りだったことに気づきます。さらにそのシーンをもう一度思い出してみると、明るい外の道→仄暗い玄関→明るさを求めるように上昇する階段→幅と高さの絞られたひっそりとした廊下→突然視界の広がる天井の高い食堂→天井の低いアルコーブ…という具合に、質と趣の異なる空間を次々に経由してきたことに気づきます。この小さな「道行き」の果てに辿り着くことで、アルコーブがいっそう魅力的な場所を感じられるのだと思います。

ここまで書いてきて、なぜ私が無意識のうちに「床・壁・天井の素材



3階にある泉さんの書斎。「明窓浄机」という言葉や「端座」という洗言葉が思わず脳裡をかすめます



寝室。台所との境壁が衝立状で天井まで届いていないのは、空間をゆるやかに繋げるためと吉野杉の化粧梁を愛でるため

や、仕上げの風合いなどをしみじみ眺めたり、手のひらで撫でさすったりしないようにしよう」と決心したのか、その理由がわかりました。この住宅は、床・壁・天井、その他、どこを見てもいずれ名のある高価そうな素材と見せ場に囲まれています。そして、その素材と見せ場のひとつひとつが「見て、見て」と自分を指さして連呼しているように思えるのです。「決心」というのは、そうした連呼を無視しなければ、この住宅の素材と見せ場の陰に潜んでいる本来の魅力と価値を発見することができないだろうという第六感が働いたせいでした。こんなことを書いたら泉さんは怒るだろうなあと思いつつ、正直に書きますが、ウォルナットの床材をラワンベニヤで覆い、吉野杉の自慢の化粧梁はそっくりプラスターボード張りの天井裏に隠し、擬ったデザイン障子を外して安物のロールブラインドを下げたとしても、私の中ではこの住宅の評価はまったく変わりません。それどころか、もしそうしてくれたら(もちろんそんなことを本気で考えているわけではありませんが…)、この家全体から立ちのぼる普請道楽的な匂いも綺麗さっぱり払拭されて、私としては、いちいち驚いたり、褒めちぎったり、感心し

たりする必要がなくなって、いっそう居心地が良くなるように思うのです。

じつは、私は「而邸」を短い期間に2度見学させてもらいました。1度目は見学会というより「飲み会」で、私が少し遅れて到着すると、アルコーブにはひと癖もふた癖もある建築家たちがとぐろを巻いており、その建築家たちに混じって竹原義二さん(「素材派」の西の正横綱です)もいて、いっそう「濃い感じ」を醸し出していました。談論大いに風発し、すっかりお酒も回ってきたところで「ひと休み」することになり、数人で1階の音楽室に降りました。そして、酔った勢いで泉夫人にせがんでピアノを弾いてもらったのです。曲目はゴールドベルグ変奏曲のアリアでした。シダレザクラの庭に面した、ほどよい大きさの静謐な音楽室とそこで演奏されるバッハ。あらためて申し上げるまでもなく、ここもまた「而邸」の中の私のお気に入りの場所のひとつになりました。

なかむら・よしふみ——建築家/1948年生まれ。

武蔵野美術大学建築学科卒業。1972-74年、宍道設計事務所。1976-80年、吉村順三設計事務所。1981年、レミングハウス設立。

主な作品:三谷さんの家[1986]、REI HUT[2001]、伊丹十三記念館[2007]など。

主な著書:「住宅巡礼」[新潮社/2000]、「住宅読本」[新潮社/2004]、「意中の建築 上・下」[新潮社/2005]、「Come on-a my house」[ラトルズ/2009]、「普通の住宅、普通の別荘」[TOTO出版/2010]など。